秋田県立大学総合科学研究彙報　第15号（2014）：55－62

明治三〇年代の渡米熱

―― 貧困問題、労働運動、『成功』雑誌との関係性 ――

加賀谷　真　澄

はじめに

一九世紀に入り、明治維新を迎えた日本は、西欧諸国に追いつこうと、産業、行政、文化、教育など、様々な分野で近代化を急いだ。封建制が崩れ、経済システムが大きく変わる過程で新たな貧困階層が生まれ、労働者の問題が生じたが、このような社会の矛盾に対処する方策を求めた時、明治社会が目を向けたのは、やはり西欧社会だった。知識人たちは自国の社会問題に取り組むため、具体的な解決方法を西欧から学ぼうとしていた。

こうした流れの中で浮上したのが、移民論である。明治初期の移民論は、アダム・スミスやジョン・スチュアート・ミルなどのイギリスの経済思想の影響を受けたものであり、それらを日本に適用し、経済学の視点から国力増強を論じたものがほとんどであった。この論調に変化がみられるのは、一九〇〇年頃である。この時期、移民をめぐる言説は、明治初期のものとは変化をみせる。個人の成功の可能性に、よりフォーカスしたものとなり、特に中流以下の階層に向けて、移民を手段とした「立身出世」を謳ったものとなった。そして、渡米を推奨する手引き書が数多く出版されるようになる。

この変化の背景には、都市の貧困・労働問題が深刻化していく中で、日本初の労働組合が生まれ、労働者の自覚が促されたこと、また、片山潜に代表されるような、アメリカ留学によって培われた自主・独立精神を持った人物が渡米案内書や渡米雑誌を発行したこと、そして「立身出世」を称揚する「成功雑誌」が流行したことなどの複数の要素があると思われる。

本論は、一九〇〇年代に起きた渡米ブームが、貧困・労働問題や「成功雑誌」の流行とどのように関わり合っていたのかを考察する。また同時期に発表された横山源之助の小説「鉄骨児」において、移民と貧困・労働問題が結びつけられて描かれていることを明らかにする。

1．貧困・労働問題と海外移民論
―日本に受容された移民思想

明治時代、貧困・労働問題と海外移民論は、どのように結びつけられたのだろうか。まずは、明治の移民論が生まれた背景を概観したい。

日本における明治初期の移民論は、西欧の自由経済思想がもとになっている。明治維新以来、西洋思想を日本に導入しようとした知識人たちは、数多くの経済書を翻訳してきた。それらの書の中で、移民政策は経済学的観点から論じられ、国が発展し続けるための欠かせない要素として位置づけられていた。西欧の自由主義経済思想に啓蒙された知識人たちは、早くから海外移民を説くようになる。こうした思想が日本の知識人たちに受け入れられ、日本の移民論は形成されていった。

『東京経済雑誌』[1] の創設者である田中卯吉は、「植民制」という記事を同紙に発表しており（一八八三年）、その中で、北海道、台湾、南洋の植民を論じている。そこに示されているのは、経済の活性化が植民によってもたらされるという考えである。田中は、植民は国家の保護のもとに行われるべきものではなく、自由・自治を原則とするべきだと訴えている。参考文献として、アダム・スミスの『富国論』を挙げ

ており、イギリスの自由経済主義がその主張の基礎となっていることがわかる。

『西洋事情』（一八六六〜七〇年）を著した福沢諭吉は、その書の中で、イギリス及びヨーロッパ諸国の繁栄が、植民地の領有と、領有地と本国との自由貿易にあると述べている。福沢諭吉の移民論は、西欧の自由経済主義に基づいており、その考えは、明治の早い時期から表明されている。時事新報[2]においては、「朝鮮国に資本を移用すれば我を利すること大なり」（一八八三年六月五日）、「支那行きを奨励すべし」（同年七月二〇日）などの移民論を発表している。福沢の移民論には、国土の狭さ、人口過剰、貧困問題を解決するための領土獲得と植民という考えが示されており、こうした考え方は、のちの移民論者たちに引きつがれていく。

田中卯吉、福沢諭吉の移民論は、松方デフレ[3]が一つのきっかけとなって登場したものであり、背景には、経済不況、知識階級の若者の就職難があった。そして、一八八四年以降、福沢諭吉の移民論は、アメリカを目指すものとなっていく。その内容は、不況で仕事に就けない若者に対し、アメリカでチャンスを求めよと訴えるものであった。イギリスやヨーロッパ諸国とは異なり、アメリカは、働きながら学業を修めることができる国であったため、中流の知識階級の若者を対象に、渡米を勧めたのである。[4]

明治初期、日本で翻訳または抄訳された西洋の経済書をみると、維新からわずか二〇年ほどの間に、数多くの書籍が日本に紹介されていたことに驚かされる。ミルの『経済学原理』は林董によって「彌兒経済論」として翻訳され（一八七五〜一八七七年）、さらに鈴木重孝が引きついで翻訳をしている（一八八二〜一八八四年）。[5] アダム・スミスの『国富論』は著者亜当斯密（アダム・スミス）、石川暎作訳として発表された（一八八四〜一八八八年）。さらに、松本直己が西欧の経済書を編訳して『経済新論』（一八八四年）として発表している。松本は、この書の中で「移住論」という項を設けているが、特にミル、フォーセット、ケーリー[6]などの書を参考にしたと記している。

こうしてみると、日本の植民思想は、西欧の経済学を土台として発展してきたことが、あらためて確認される。日本に紹介された西欧の思想は、その後の日本における移民論の方向を決定づけた。そして一八九三年に榎本武揚[7]の呼びかけによって植民協会が設立されると、その「設立趣意書」には「我国には北海道其他未開の地あるも其如く多くの人口を容るゝの余地なかるべし」[8] と、北海道では入植者を収容し切れないこと、そして「海外に我国の殖民あれば彼ら自ら本国の物品を受容するのみならず外人をして之を受容するの道を知らしめ以て大いに通商の端を開くべし」[9] と、海外に貿易の拠点を設けることによって、経済が発展することが記された。これ以降、移民論は国外指向を強めていくことになる。そしてまもなく、一九〇〇年に入ると、渡米ブームがやってくるのである。

2．渡米案内書ブーム

アメリカ向け旅券発給数は、一八八〇年には三五件に過ぎなかったのが、年々増加し、一八九一年には一〇、五〇一件となった。[10] この年、アメリカ向けの旅券発給数は、それまで一位であったハワイを追い抜いた。移民のカテゴリーをみると、商人、魚農業、職人、労働者がほぼ九割を占めており、この時期、出稼ぎ目的で渡った者が多いということがわかる。この頃まで、いくつか渡米論が発表されているが、いずれも国益という観点から渡米を論じるものであった。例を挙げると、武藤山治の『米国移住論』（一八八七年）は、日本の下層民を移民させ、経済問題を解決するべきだとしており、国内の貧困問題を、国外に持ち出すことによって解決しようとする考えがみられる。石田隈次は『来れ日本人』（一八八七年）を著し、学生の渡米を奨励している。石田は、学生が渡米し、永住すること、そして「第二の日本」を建設し、欧米人と対等な関係を築くことを説いている。これは、貿易振興のために海外拠点をつくるという考えにもとづいている。

明治の移民論は、経済的観点から発展したものであり、日本の国土が全国民を養うには足りないこと、若い世代にチャンスが少ない等の問題が、移民によって解決され、国益につながるという認識が知識人に浸透していた。

しかし、こうした渡米をめぐる論調は、一九〇一年に片山潜が『渡米案内』を出版し、大ベストセラーとなると、少しずつ変化をみせるようになってくる。片山潜は『渡米案内』の冒頭で総論として、年々伸びる日本の人口増加率について触れながらも、「決して日本の国が之を養う能わざるには非ず」[11] とし、農地を拡大すれば、増加する人口問題に十分対応できると述べている。そして日本が目指すべきは工業化であるとし、国の近代化が、若者の海外雄飛によって促進されることを説いている。

ただし、『渡米案内』の序文は、国のあるべき未来像を示しているものの、その書の実質的な内容は、渡航前の準備から、現地に着いてからの生活設計、異国で暮らす心構えなど、これから渡米する若者に向けた、物心両面にわたる具体的なアドバイスである。実のところ『渡米案内』は、アメリカで著者本人が身につけてきた自主・独立精神を日本の若者へむけて発信した書であるといえよう。次の引用からは、個人の努力次第で成功がつかめるというアメリカ的な発想がみられる。

> 吾人が其移住すべき人に就いて言はゞ、東京に在る富裕なる所の学生よりも、寧ろ労働に従事せる人を以て宜しきものと看做すものなり、何となれば意志薄弱なる学生が金を握って移住するよりも却つて農家の子弟が無一物にして移住するも、其忍耐力の強きことを信ずればなり。[12]

この箇所は、片山潜が自分のことを指しているようである。岡山の農家の出身で、生活苦に耐えながら勉学を続け、渡米後も勤労学生をして苦学しながら学位を取得した片山潜は、野心はあっても資力がない若者に向けて書いている。片山潜が熱心に渡米をすすめた対象は、経済的に社会の中流以下の層の若者たちだったのである。次の引用には、片山潜のところに、数百人という貧しい労働者たち―人力車夫や新聞配達、丁稚、工場労働者―が、渡米に関する助言を仰ぎに来ていた様子が述べられている。

> 著者が帰国して玆に五ヶ年なり。其の間我青年にして渡米の志あり志望ありと云ふて特に余を訪問せし者数百人なり（中略）其内には人力車を引きて生活せし者あり新聞配達をして勉強せし者あり丁稚より決心して渡米せしあり鍬を投して渡米せしあり工場を辞して渡米せし者ありて多くは苦学生なりき。[13]

片山潜の『渡米案内』が出版されると、「一週間に二千部も売れると云った様な風で（中略）『太陽』でさへ渡米案内欄を設けて盛んに渡米熱を鼓吹させ、のみならず、渡米に関する書物をも発行した」[14] と、たちまち渡米ブームが起きた。これ以降、アメリカ留学経験を持つ者によって書かれた渡米の指南書が数多く出版されるようになった。これらの渡米案内書の著者たちは、片山潜と同じく、渡米が国益となることを前提としつつ、個人の成功の可能性をより強調している。

片山潜の『渡米案内』と同じ年（一九〇一年）に刊行されたものをみてみると、一柳松庵編『渡米の栞』（佐々木勘助刊）、島貫兵太郎『渡米案内大全』（中庸堂）渡部四郎『改正増補英会話と職業編』（サンフランシスコ、堂本商会）等があり、これらの書には、アメリカに渡る前の資金の調達方法から船上での服装、食事の作法や渡米後に必要となる英会話の紹介まで具体的に記されている。また、料理人や給仕、スクールボーイ、庭師などの家内労働の種類や、農園労働の内容、そして職種別の給与なども記載され、渡米後の生活設計の参考資料となっている。

渡米案内書の著者たちの主張は、それぞれの書の序文で確認することができる。それらはほぼ全て、海外移民＝国益であるという明治以来の価値観をふまえた上で、個人の成功の可能性に、より力点を置くようになっている。これらの手引き書が、多くの読者を惹きつけたのは、英語に加えて料理や家政管理などの特定の技能を身につければ、高収入の職業に就ける可能性があること、また、勤勉に働くことによって、学資を貯め、学問を修めることができる等、個人の努力次第で「立身出世」がかなうとされていたからである。渡米の手引き書がターゲット

とする読者層は、最初から勤労、苦学することを前提とした中流以下の層であり、手引き書は、彼らに、国内ではかなえられない立身出世の夢を実現可能なものとして描いてみせたのである。

3．貧困・労働運動と「成功雑誌」

国益から個人へと、移民をめぐる言説に変化が見られるようになった要因は、貧困・労働問題が社会で大きく取り上げられるようになった動きと無縁ではないだろう。一八九六年、一三年ぶりに日本に帰国した片山潜は、キングスレー館で幼稚園を運営しながら、労働者のための夜間学校を開校したり、社会問題の講演会を開いたりしている。この間、特に本業と呼べるものはなかったと言っているが、帰国の翌年には、早くも日本初の労働運動と関わりを持っている。

> 予はキングスレー館の主人株ではあったが別に之と云ふ定まった職業もなければ、又金まうけも為して居無いし、何も演説が上手という訳でも無く或は労働問題の専門家でもなかつたが、演説家の頭数には利用されて、何時でもきまつて出席して演説した、で段々其の労働社会に知られるに至り…到頭労働問題の専門家と成るやうに成つた。[15]

一八九七年、アメリカ帰りの高野房太郎、城常太郎、沢田半之助[16]が中心となって日本初の労働組合、労働組合期成会を組織した。片山潜もすぐにこれに加わり、労働組合期成会の機関誌『労働世界』の主筆を務めるようになる。片山潜は、社会主義者として、労働運動に関わり、言論活動をするようになるが、この他、自ら夜間学校を開き、労働者に英語を教えたりもしていた。次の引用は、商店の店員を対象に開校した夜間学校について書かれたものである。これをみると、片山潜のもとに集まり、直接指導を受けた若者の多くが、実際にアメリカへ渡ったことがわかる。

> 一級の生徒が一五六人であったが数年を出でずして、此の一四人迄は渡米した。此の内或る者は立派に成功して居る、其の夜学校へ通学せしめた、其等の商店の主人は結果に於て満足せぬかも知れないが、教へた予から云はしむれば、實に満足せざるを得ない。[17]

日本で労働運動の中心的存在となっていた人物が、渡米を希望する若者に英語を教え、渡米を奨励する書を発表していたことは興味深い。それは、渡米の手引き書が、労働者に向けたメッセージであったと言えるからである。海外移民、渡米が国益となるという主張が前提にあっても、そこには、どのような階層の人間でも、幸福を追求する権利があるという欧米流の考え方がみえるのである。

また、この時期、成功雑誌が流行したことにも留意しなければならない。アメリカでマーデン（Orison Swett Marden、一八五〇～一九二四年）が、人生の成功者たちの談話や逸話、論説などを掲載した雑誌『サクセス』（*SUCCESS*, 一八九八）を創刊し、これが大当たりするが、日本でこの雑誌を見た村上俊蔵が一九〇二年、日本版の『立志独立進歩之友　成功』誌を創刊する。内容は、西洋人と日本人の立志、偉人伝であり、『サクセス』を真似たものであった。読者の相談欄には、資金がないなかでの上級への進学相談や、英語を独学で習得すること、そして渡米の相談が寄せられており、購買層は経済的に中流以下の一〇代から二〇代の若者たちであった。

この『成功』には、特別賛成員として幸田露伴、巌本善治、徳富猪一郎、村上専精、井上円了、志賀重昂が名を連ねており、名誉賛成員として加藤博之、海老名弾正、鎌田栄吉、神田乃武、井上哲次郎、新渡戸稲造など、当代一流の知識人や著名人（政治家、実業家、宗教家など）が名を連ねており、この雑誌が、社会的に大きな関心を集め、高い評価を得ていたことがわかる。そして、興味深いことに、島田三郎（賛成員でもある）、阿部磯雄、片山潜などの社会主義や労働運動とかかわっている人物が執筆者として加わっているのである。

ここで貧困・労働問題と移民、成功という要素がつながる。片山潜に代表される、明治後期

の移民推進論者の中では、これらの要素が結びあわされ、貧困や労働問題を解決する策として、移民が有望視されていたのである。この時期には、海外移民は、もはや明治初期の国益という目標より、チャンスに恵まれない若者の雄飛、労働者の立身の手段としてみなされていたことがわかる。

4．横山源之助の「鉄骨児」と移民

片山潜の『渡米案内』がベストセラーになる直前、国内でチャンスに恵まれない若者は、海外に雄飛をすれば道が開ける―という考えが、明確に打ち出されている物語が発表された。それは、横山源之助の小説「鉄骨児」である。この作品は、片山潜が主筆を務める『労働世界』に、一八九八年一月一日から七回にわたって掲載された（同年一月一日、一月一五日、二月一日、十五日、四月一日、五月一日、十五日。第三号～六号、第九号、第一一号、第一二号）。この作品は、渡米ブームとどのように関係しているのだろうか。まずは、物語の概要をみてみたい。

物語の主人公、武二郎は、両親を亡くしたために経済的に窮し、学業を諦めざるを得なかった若者である。現在、人力車夫として働いているが、一年前まで同じ下宿で暮らした仲間がそれぞれ医者となったり、商業学校を卒業して「桑港（サンフランシスコ）」へ渡ったりしたことを思い、我が身と引き比べて嘆息する。ある日、街中で「豆売（まめうり）」の老人が若者たちにからまれていることころに通りかかり、老人を救出する。この時偶然にも、かつての下宿仲間であり、今は医師となっている旧友に再会する。この友人から、ある官吏のお抱え車夫の職を紹介されことになる。武二郎は、条件の良い仕事を得て、安定した経済と、勉学の時間を確保できるのだが、思わぬトラブルに巻き込まれることになる。

武二郎は、同居する雇い主の娘に、いつしか思いを寄せられるようになる。しかし、恋愛に全く興味が無いため、娘からの恋文や、思わせぶりな態度が煩わしい。やがて、娘とは正反対の慎ましやかな「下女」が星野家に雇い入れられる。その祖父は、かつて武次郎が助けた「豆売（まめうり）」であった。対照的な娘二人の存在が示され、主人公との関係をめぐってストーリーが展開していくことが予想されるが、これ以後、何が起こったのかは一切描かれない。

その後の展開は、武二郎が友人の医師に宛てた手紙によって語られる。それによると、「下女」と武二郎の仲を、雇い主の娘が疑い、両親に告げ口したため、武二郎は身に見に覚えのない罪で解雇されてしまったという。しかし、この不運がかえって主人公を奮起させ、渡米を決心するという筋である。

この作品は、後半からの人間関係のトラブルに十分な肉付けがなされておらず、途中で途切れた物語のようにみえる。作品名「鉄骨児」が示すように、主人公は、社会の不公平に抗議し、弱者を助ける硬骨漢であり、苦学、恋愛、など、読者に受けそうな要素がちりばめられているのだが、そうした物語を発展させる装置が、ほとんど機能していないのである。そして、物語はラストまで一気に進んでしまうのだが、主人公が日本を飛び出す決意だけは、確固たるものとして示される。

> 幸ひ便宜を得たれば、不日米国へ渡航して将来大いに為す処有らんとす[18]

この作品は、結末に急ぐために骨組みが組まれているようであり、小説としての完成度は低い。しかし、人物の感情の動きや、人間関係など、細かな描写が排除されていることで、作家の意図がかえって浮き彫りになる。つまり、作者の目的が、貧しい青年の海外雄飛の物語を書くことにあるということが、明確にみえてくるのである。

なぜそう言えるか。それは、この物語の作者、横山源之助が、労働運動、社会主義者たちと、どのように関わっていたかをみればわかる。「鉄骨児」は、横山源之助という貧困・労働問題について明確な問題意識を持った人物が、社会主義者、労働活動家たちとの協力関係の中で描いた作品だったのである。

横山源之助は、一八九五年～一八九九年までの間、毎日新聞（横浜毎日新聞。島田三郎が社長）の記者として、日本各地をまわり労働者の

環境と、貧困状態を調査し、新聞・雑誌等に報告しており、社会問題の専門家として名を知られるようになっていた。いた。そして、一八九九年には、それらの記事を集成し、『日本之下層社会』として刊行する。「鉄骨児」が発表されたのは、『日本之下層社会』出版のための準備をしていた、その最中であった。

「鉄骨児」が発表された一八九八年の横山源之助の仕事をみると、「紡績工場の労働者」『国民之友』（二月）、「労働者は奴隷に非ず」『労働世界』（三月、第九号）、「書生と労働」、「人力車夫に告ぐ」（同、四月、第一〇号）、「職工証不可論」（同、一〇月、第二一号）などの調査報告を発表しており、労働者を取り巻く環境をよく把握していたことがわかる。また、これらの調査は、同時進行で執筆していた「鉄骨児」に素材を提供したと思われる。これらの記事の中で、人力車夫について言及したものをみてみたい。

> 人力車夫に告ぐ
> 余輩は諸氏が不規則の労働に服し、不定の報酬の下に身体を壊りつつある境遇に深く同情す、唯だ不規則なる労働に服するの故を以て、其の生活も極めて不規則乱雑を極め、僅にその日丶を糊口にして戒心する事なけれは、後日更に今日に倍する苦難に出会ふと必せり、覚悟いかん。諸氏の仲間にバンあり、之を改良して規則を定め、今までの如く酒を飲み悪態をつくに止めず醵金を正確にして、労働世界が常に称ふる組合の方法をとり、斯其の生活を改むるを力むる意なきや、敢て告ぐ。[19]（※下線は論者による）

人力車夫の中で、営業権を得て組織に入り、決まった駐車場を持つ労働形態を「バン」と呼んでいたが、これを発展させ、労働組合にせよと訴える内容である。もう一つは、書生について書かれたものだが、勤労学生が増加傾向にあることが述べられている。

> 書生と労働
> 近年書生に食客となる風廃れたると共に、労働に服すると漸々行はれ来る、活版職工、牛乳配達、新聞配達、新聞売子、人力車夫、随分多し。[20]（※下線は論者による）

これをみると、当時、多くの若者が、書生として個人宅に入るのではなく、労働者として働きながら学業を修めようとしていたことがわかる。記事で挙げられた職種の中には「人力車夫」もあり、「鉄骨児」の主人公の姿と重なる。こうした記事と、「鉄骨児」が発表されたのは、ほとんど同時期であるため、横山源之助は、取材した勤労学生の実態を、小説に反映したと思われる。

また、もう一つ、留意しなければならないのは、横山源之助と、片山潜との関係である。横山源之助の活躍の場は、主に新聞・雑誌上におけるものであったが、労働運動家や社会主義者たちとは、様々な場面で密接なつながりを結んでいた。横山源之助は、労働組合期成会の機関誌『労働世界』の常連寄稿者であったほか、片山潜の著書『労働者之良友喇撒伝』に、高野房太郎とともに序文を寄せている。また、社会研究会、貧民研究会を立ち上げており（ともに一八九八年の設立。のちに社会研究会は貧民研究会に吸収される）、そこにもまた、片山潜と高野房太郎が参加している。これらの事実から、横山源之助が、労働運動家や社会主義者たちと人間関係を構築しており、その中でも、とりわけ片山潜とは、協力関係を結んでいたとがわかる。したがって、『労働世界』に掲載された小説は、主筆である片山潜の意に沿うことが意識されていたはずである。

それを示すように、この作品が、『労働世界』の趣旨に沿う、特別なものであることを述べている一文がある。それは、一八九八（明治三一年）年一二月十五日の『労働雑誌』（第二号）の予告文にみられる。

> 来る三十年一月一日の労働世界は非常なる意匠を凝らし面白き絵を沢山に入れ、寄書、論説、社説も充分に精撰し以て万丈の大気焔を吐かんとす又た此の初摺より号を追ふて快活雄壮なる労働小説を記載すべし其の

題号は「鉄骨児」著者は半如夢氏（論者注：横山源之助の筆名）なり労働世界は其他種々の改良を加へて以て愛読者の厚意に報ぜん[21]（※下線は論者による）

「鉄骨児」は、「労働小説」として予告文に紹介されているのである。この「労働小説」という言葉が使われたのは、日本文学史において、この時ただ一度きりしかなく、『労働世界』においてもその後使われることがない。[22] 予告文では、この言葉が特別な意味で使われていることは明らかである。つまり、これは、労働者に向けられた読み物であり、娯楽を目的とした小説とは一線を画しているという表明なのである。

横山源之助がこの小説を発信した対象は、片山潜のもとに通っていた、渡米を希望する若い労働者たちのような階層であったことは間違いないだろう。また、人力車夫を主人公としていることは、下層労働者の最大の職業グループにアピールする狙いがあったと思われる。横山源之助は、『日本之下層社会』の中で、都市部の貧民に最も多い職種が人力車夫であることを報告している。「労働小説」として発表された「鉄骨児」は、貧しい暮らしに耐え、労働しながらも向学心を抱き続け、立身出世を願う多くの若者が、自分の姿を重ねて夢を描けるような作品だったのである。この物語は、労働者の意識改革、地位向上に取り組みながら、労働者階級の若者に向けて、渡米を奨励する活動してきた片山潜と、足並みをそろえようとするものだったのである。

また、貧困・労働問題を取材していた横山源之助が、片山潜のもとで「貧困」「下層労働者」「若者」「海外雄飛」という要素を組み立てて「鉄骨児」という物語を作り上げていったのは、貧困・労働問題の有効な解決策が海外移民であるという認識が、労働運動家・社会主義者の間で、共有されるものだったことを示しているのである。

おわりに

明治初期の植民思想は、西洋の自由経済主義から発展したものであり、移民は、狭い国土における人口過剰を解消し、また貿易を促進させるための、有効な策であるという趣旨のものが主流であった。しかし、そうした論調は、一九〇〇年代に入ると変化する。その要因は、貧困・労働問題が新聞・雑誌等で取り上げられるようになり、労働者の意識を高める労働運動が勃興したこと、そしてまた、立身出世をうたう成功雑誌の流行があったこと、さらに、その流れに渡米ブームがマッチしたことにある。

この時期の移民論は、明治初期の植民思想とは明らかに意味合いが異なる。横山源之助の小説「鉄骨児」において、貧困・労働問題と海外雄飛が結びつけられ、渡米が理想化されているが、これは当時の知識人たちの共通した見方だったといえるだろう。この時期の渡米ブームは、中流以下の階層の若い労働者たちが、労働運動家や社会主義者たちによって主体化されたものだったのである。

註

1 明治・大正期の経済雑誌。一八七九年に自由主義経済学を信奉する田口卯吉が創刊、死去するまで主宰した。一九二三年に廃刊。

2 一八八二年、福沢諭吉により創刊された新聞。慶應義塾舎出版から発行されており、福沢諭吉とその門下生が中心となって運営していた。

3 一八八一年に大蔵卿となった松方正義による財政政策。西南戦争後のインフレ対策として行ったが、激しいデフレを引き起こした。

4 福沢諭吉が渡米を推奨するようになった背景として、立川は、明治一四年の政変により慶應出身者が官界入りを閉ざされ、「仕事なきに窮し」ていたこと、郷里の育英機関である中津開運社が米国留学生を選抜しようとしていたこと、明治一六年の徴兵令の改正で、外国在留者は徴兵猶予の対象となったこと、そして息子の一太郎の留学仲間をつくる意図があったこと等を挙げている。一九〇〇年以降の渡米ブームの質とは異なることがわかる。立川健治『明治前半期の渡米熱(一):『時事新報』』、富山大学教養部紀要、(二三)、一九九〇。

5 翻訳は、原書の三篇までにとどまっている。

[6] John Stuart Mill（一八〇六〜一八七三年）、Henry Fawcett（一八三三 〜一八八四年）、Henry Charles Carey（一七九三〜一八七九年）らの自由主義経済学は、明治の知識人に大きな影響を与えた。

[7] 幕末から明治期にかけて軍人、政治家として活躍した。殖民協会設立の頃は、農商務大臣を務めていた。

[8] 黒田謙一『日本植民思想』、弘文堂、一九四二、二四五頁。

[9] 前掲書、二四六頁

[10] 今井輝子『明治期における渡米熱と渡米案内書および渡米雑誌』津田塾大学紀要（一六）、一九八四、三〇五頁。

[11] 片山潜『渡米案内』、渡米協会、一九〇一。

[12] 片山潜『自伝』、岩波書店、一九五四、六頁。

[13] 前掲書、七〜八頁。

[14] 前掲書、二一三頁。

[15] 前掲書、二一七頁。

[16] これら草創期の労働運動家の略歴は次の通り。高野房太郎（一八六九〜一九〇四）、一八八六年渡米、一八九二年に苦学しながらサンフランシスコ商業学校を卒業。一八九一年には城常太郎らと職工義友会を組織。一八九四年に AFL（アメリカ労働総同盟）本部でゴンパースと会い AFL のオルガナイザーに任命される。一八九六年日本で最初の労働問題演説会を開催、労働組合期成会を結成する。城常太郎（一八六三〜一九）は神戸で靴工として修業したのち、サンフランシスコに渡り高野房太郎と知り合う。一八九七年、労働問題演説会の弁士を務め、労働組合期成会の仮幹事となる。沢田半之助（一八六八〜？）一八九〇年サンフランシスコに渡り、洋服屋を開業。のちに米友協会を設立し、日米親善に努めた。（朝日日本歴史人物事典を参照）

[17] 片山潜『自伝』、二一二〜二一三頁。

[18] 横山源之助「鉄骨児」『横山源之助全集』第九巻、法政大学出版局、二〇〇六、七二頁。

[19] 『労働世界』第七号（一八九八年四月十五日）。

[20] 注一九に同じ

[21] 『労働世界』第二号（一八九七年一二月十五日）。

[22] 立花は、「労働小説」という呼称が用いられたのがこの時だけであること、日本の学史上において他に使用例がないことについて、この作品が文学と切り離されたものとして見なされた可能性を示唆している。この後、「労働小説」は、同時期に登場した「社会小説」の後ろに隠れたまま消えてしまう。立花雄一「黎明期労働運動と近代文学--横山源之助と岸上克巳」『大原社会問題研究所雑誌 』（五七九）、二〇〇七。